

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録 アフリカ大陸54カ国をリードするケニア共和国
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 113, No. 2, pp. 34-35
Citation(English)	THE INVENTION, Vol. 113, No. 2, pp. 34-35
発行日 / Pub. date	2016, 2



知財見聞録

アフリカ大陸54カ国をリードするケニア共和国

東京工業大学 イノベーションマネジメント研究科 教授 田中 義敏

ジョモ・ケニヤッタの熱い思い

筆者のアフリカ出張というと、従来は地中海沿岸の北アフリカであった。「北アフリカはアフリカではない」という人もいるが、確かに今回のケニア共和国訪問は、初めて本当のアフリカを体験した気がする。

ケニアは、東アフリカに位置する共和制国家であり、英国連邦加盟国である。首都はナイロビ。19世紀、英国による植民地化が進むと、ケニア沿岸には英国とドイツが進出した。一連の権力闘争の末、結果として英国が優勢となり、1888年にはケニア沿岸部が英国東アフリカ会社により統治され、1895年には英国領東アフリカが成立する。

1920年には英国直轄の植民地となり、その後、現在のナイロビの中心部に位置するキクユ族を中心とした政治運動、第二次世界大戦、ケニア・アフリカ同盟、ケニア土地自由軍による英国への抵抗運動、ケニア・アフリカ民族同盟の設立等を経て、1963年に英連邦王国として独立。翌年に共和制へ移行し、ケニア共和国が誕生する。

一連の政治活動の経緯を見るに、ケニアは英国の植民地以降、東アフリカ地域を背負って独立へのリーダーシップを発揮した国とっていいだろう。

ケニアの初代首相（1963～1964年）であり初代大統領（1964～1978年）を務めたジョモ・ケニヤッタの語録として次のような記録が残っている。

「白人がアフリカにやってきた時、我々は土地を持ち、彼らは聖書を持っていた。彼らは我々に目を閉じて祈ることを教えた。我々が目を開いた時、彼らは土地を持ち、我々は聖書しか持っていなかった」

この言葉から、独立および国家の繁栄を願って立ち上がった彼の熱い思いが伝わってくるかのようである。

ジョモ・ケニヤッタが注力した政策の一つに教育機会の確保があった。彼が創設した教育の舞台が1980年に中堅技術者育成機関としてスタートし、キャンパスも教員も学生もない状態から日本の協力が開始された。

その後21年間にわたる協力により、現在のケニア国立ジョモ・ケニヤッタ農工大学（JKUAT）として成長を遂げた。同大学は50を超える日本の大学をはじめ、多くの関係者の努力に

よって、今や「ケニアの総合大学」として定着し、「農学・工学系に強い大学である」と実社会からの評価も高い。

2000年、国際協力機構（JICA）の協力終了時に3000人弱だったJKUATの学生数は、現在、3万人強となっている。

AFRICA-ai-JAPAN Project

一方で、アフリカ域内の社会開発を担う人材を養成・確保するには域内の高等教育の強化が重要であるとの認識に立ち、2008年にアフリカ連合委員会が汎アフリカ大学（PAU）構想を立ち上げた。PAUは、アフリカを5つの地域（北部、西部、中部、東部、南部）に分けて各地域に対象分野を定め、おのおのホスト国、ホスト大学、支援パートナー国（LTP）を設けている。

PAUの東部地域の対象分野は「科学技術イノベーション（STI）」、ホスト国



基調講演の様子

はケニア、ホスト大学はJKUATとなっており、LTPに関しては2013年1月、アフリカ連合(AU)からの継続的な強い要請に応じて日本が就任した。

そして、2014年6月に新プロジェクト (AFRICA-ai-JAPAN Project) が開始、日本のJICAの支援も再開された。

なお、aiは“african innovation”を意味しており、同国では「アフリカ型イノベーションを目指すことにより、アフリカの底力をつけるプロジェクト」として位置づけている。

ケニア訪問での新たな発見

今回、筆者がケニア訪問で担ったのは、AFRICA-ai-JAPAN Projectの一環である人材育成支援活動であった。Vice Chancellor, Prof. Imbuga学長からの招待により、以下の任務を無事に完了してきた。

① The 10th JKUAT Scientific, Technological and Industrialization Conference” Science, Technology, Innovation and Entrepreneurship for Sustainable Development”での基調講演(発表と質疑応答)と情報発信

② JKUAT Senate Membersおよびマネジメントとのワークショップ会合

③ JKUAT Enterpriseへの訪問調査

④ iPDeC: Innovation Center for Product, Development and Commercializationとの意見交換と指導

短い滞在ではあったが、多くの方々と出会い、本当のアフリカに触れ、産業発展、工業化、科学技術立国を政策目標として掲げているケニアの勢いを実感してきた。現地で活躍する日本人も増えてきてはいるものの、日本全体からみれば、いまだ遠い存在である。

我々は、とかく世界を距離で捉えがちであるが、相互理解のためには時間を捉えた視点も重要である。実際に現地を訪れてみると何十年も前の日本、場合によっては何百年も前の日本を垣間見ることさえある。

日本の常識や視点で世界を把握することはできない。その国がたどってきた歴史、文化、宗教など、さまざまな要因がその国のアイデンティティーに大きく関わっているからである。

世界はとにかく広い！ 筆者はアフリカ大陸ではたったの4カ国しか訪問していない。アフリカ54カ国のうち、まだ50もの未訪問国がある。今後、どこまで訪問できるか、まさに筆者に残された時間との闘いである。

次号は、「大自然のケニア」をメインテーマに紹介したい。



講演後の集合写真



Prof. Imbuga学長(右端)と記念撮影



学内の食堂で盛大なレセプションが催された



AFRICA-ai-JAPAN Project, Prof. Obanda



産学連携・知財担当Director, Prof. Kariuki